

石川淳全集

第三卷

石川淳全集 第三卷

筑摩書房版

增補 石川淳全集第三卷

昭和四十九年四月二十五日第一刷發行

著 者 石 川 淳

發 行 者 井 上 達 三

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話 東京 〇七六五一（代表）
振替 東京 四 一 二 三

印刷 株式會社 精興社
製本 牧製本印刷株式會社

石川淳全集第三卷

第三卷目錄

最後の晩餐	セ
かれらの酒杯	三七
懸想文賣	充
藤衣	九七
善財	一三三
片しぐれ	一九五
鳳凰	二三三
野守鏡	二四二
錦木	二九九
影ふたつ	三〇九
夜は夜もすがら	三五五
南枝向日	三六九
瀧のうぐひす	三九一

篠船……………四〇五

妖女……………四三三

梟……………四六七

望樓……………四八七

演技……………五〇一

おとし 堯舜……………五二七

おとし 李白……………五三五

おとし 和唐内……………五五一

おとし 列子……………五六九

おとし 管仲……………五八九

おとし 清盛……………六〇五

おとし 業平……………六二三

最後の晩餐

『文藝春秋』昭和二十三年九月號

一

草むらに蛇の走るやうに、横からつと伸びた女の手の、堅ぶとりにみづみづしいのが、いきなり男の胸もとにすべり入つたとひとしく、開襟シャツのはだかつた素肌の胸に肩からななめにかつてゐるほそい絹の紐が、しなやかな指さきにからまれて、ぐいと引き出された。

「なにをする、ちどり。」

「見せてよ。」

掛守か財布か、おさへるひまもなく飛び出たその紐のさきに、きらりと光つて、あ、十字架、銀の小さい十字架が宙にをどつたと見るまに、どこをどうひねつたのか、それはもう紐からはなれて、女のてのひらの中に吸ひこまれてゐた。

「おい、仲間のふところをねらつてどうするんだ。」

「泥棒に十字架は似合はないよ。」

「大きな聲を……」

「いいぢやないか。ここには、あんたと次郎さんとあたししかゐないんだからね。自分が泥棒だつてえことを、自分に遠慮してみせるにもおよばないよ。」

疊に投げ出してゐた脚を、そのままながたと突つ張つて、やけにからだを反らしながら、もたれかかつた窓框の、そこが二階の東むきの窓で、下からすれすれに伸びて來てゐる梧桐の葉ごしに、梅雨の晴間の朝の光が髪に、顔に、頸すぢに、まだらに透いて、青い影のあはく、白のブラウスを染めてながれるのを、胸のくぼみにたたへたふぜいで、盛りあがつた乳房のかたがいつそ蒸し暑かつた。そのちどりの脚のさきに、これも疊に寝そべつてゐたやつが、ふつと鎌首をあげて、

「おい、ちどり。」

「なにさ、次郎さん。」

「かへしてやれよ。」

「いやだよ。」

「中尉があんなに大事にしてゐる十字架ぢやねえか。つまらねえいたづらするなよ。」

「よけいなお世話だよ。取つたものはあたしのものさ。かへすといふ手はないよ。」

「おまへが十字架もつてどうするつもりだ。おまへがもつてれば似合ふとでもいふのか。マスケットにもならねえだらう。」

ひとり壁ぎはにあぐらをかいてゐたのが、ちよつとけしきばんで立てかけた膝を元に直して、
「よせ、次郎。」

「え。」

「いかにもおれにとつては大事なのだが、おもへば、そのおれが泥棒にまで墮ちかかつてゐる現在だ。十字架をちどりに拘られても仕方がない。おれがすでにちどりの同類になつてゐるんだから、かへせといふ資格は無い。」

「なんだつて。」

とたんに、窓框から刎ねかへつたいきほひで、

「ねえ、申尉、一太さん。だからおまへさんはキザだつていふんだよ。墮ちたんだつて。その墮ちたところがあたしの同類なんだつて。笑はせら。墮ちたといふと、なんだかおまへさんは上にゐたみたいだね。おまへさんが上で、あたしが下と、いつだれがきめたのさ。」

「その口ぶりで、きみのたましひのお里が知れる。おれはおれが上だと主張してゐるんじゃない。ただ、おれは一般に人間には上と下があつて、すぐれた人間が上で、いやしい人間が下だとおもつてゐるんだ。たしかに世の中には、すぐれた人間といふものがあり、いやしい人間といふものがある。そりや、どうしたつてさうにちがひないんだ。さうでなければ、世の中といふものが出来上りつこないぢやないか。ところで、ついさつきまで、おれはすぐれた人間の世界のはうに、つまり上むきの姿勢に人生觀を保つて來たし、またその方向に身柄をもち上げて行かうと努めるきもちでゐた。それがたつたいま、今夜から泥棒をはじめようといふ相談がまとまつたとたんに、人生觀はまだ依然として上むきのままなのに、身柄はがつたり下のはうに墮ちた。おれはおれの人生觀から見て、墮ちたといふことばを使ふ權利がある。だつて、泥棒といふやつ、どうしたつ

てすぐれた人間のする仕事とはおもはれないからね。」

「あきたね。さうすると、あたしはやつぱりいやしい人間の組になるんだね。あたしだつてたまには泥棒ぐらゐりしないことはないけど、自分がいやしい人間だなんて、そんなばかばかしいこと、かんがへてもみないよ。泥棒しながら、泥棒がどうのかうのつて、つまらない心配はしないよ。第一おまへさんは泥棒についてなにかいふ權利は無いぢやないか。自分でやつてみたことある。無いだろ。塵一本とつたことのない泥棒だなんて、世の中にあるかね。それどころか、今あたしに十字架をとられたばかりぢやないか。なんだつけね、人生観かね。あたしの人生観から見れば、おまへさんはただのまぬけな人間なんだよ。まぬけな人間にかぎつて、仕事をはじめようといふまぎはに、へんなことをいひ出すからこまりものさ。」

ばたばたと、次郎が足のうらで疊をたたきながら、

「よせやい。そんなこと、どうだつていいぢやねえか。いい加減にしろよ。」

むつくりおきあがつて、一太のはうにむき直つて、

「ねえ、中尉、せつかく泥棒開業といふことに相談がきまつたんぢやねえか。どかんと一つ、きもちよく行きてえな。おれはものをかんがへるなんてことぜんぜん知らねえ。戦争、よし來た。兵隊、よしきた。敗戦、よし來た。カツギ屋、よし來た。今度は泥棒、よし來たなんだ。この分だと、ひとごろしだつて、まだ戦地のほかではやつてみたことはねえが、その場にぶつかればやつぱりよし來ただらう。かんがへるよりさきに、手足がうごいちまふんだから仕方がねえや。だいたい泥棒といふことを切り出したのは、中尉、おまへぢやないか。おまへみたいにインテリで

腕つぶしのつよいのがいつしよにやつてくれるんならと、おれも乗氣になつたんだ。さいはひ、ちどりの狙ひをつけておいたうちが一軒あるといふんだから、わたりに舟だ。ずばりとやつつけよう。」

「泥棒は、おれが自分でさうならうと決心したことだ。かんがへぬいた末にできあがつた決心だ。おれひとりでも、きつとやる。」

「さう、さう、その調子。」と、ちどりは盆に盛つた夏蜜柑をとつて剃きながら、「それでいいんだよ、一太さん。あたしはね、あんたといふひとは好きなんだけど、この十字架といふものがどうにもキザでたまらないから、ちよつと取上げてみたんだよ。泥棒なら泥棒一本で行かうよ。それから、失禮しちやふけど、その壁の寫真ね、あれをばづしちやつたらなほいいね。あんたにとつちや大事なおぢいさまの子爵さまかも知れないけど、でここの大禮服の寫真なんか、いやらしいね。大むかし小學校で御眞影を無理にをがませられたことをおもひ出して、ぞつとするよ。十字架と大禮服は、まあお附合ごめんだね。」

それには答へずに、一太はそばに脱いであつた上著のかくしから札束をつかみ出して、

「次郎、ビールを買つて來ないか。」

「よし來た。これこそほんとのよし來ただよ。」

すぐ立ちあがつて行く次郎のうしろから、

「次郎さん、あたしもいつしよに行かう。肉かなにか買つて來ようよ。」

梯子段のおりぎはで、ふりかへつたちどりが、

「一太さん、かへしてあげるよ。」

ぱつと投げてよこした十字架が、一太の膝をかすめて、夏蜜柑の皮の散つてゐる盆の上にかちりと落ちた。梯子段を駆けおりる足音の消えたあと、急にしづかになつた部屋の中で、一太はぼそつとひとこと。

「罪。」

しぜん、眼が十字架のほうに惹かれた。この銀の十字架は壁にかかつてゐる寫眞の主、祖父からゆづられたものであつた。この家もまたさうである。もつとも、いくさののち一太が大陸からかへつて來たときには、ここ池上の家はすでに猛火に焼きはらはれて、母屋は跡かたもなく、庭は荒れみだれた中に、わづかに別棟の小さい二階建しか残つてゐなかつた。これはむかし祖父が郷黨の書生などを世話するために建てたもので、現在では一太ひとりの住居である。祖父は火災ののちほどなく死に、父母はそれよりもずつとまへに死んでゐた。一太は幼少のときからほとんど祖父の手ひとつで育てられて、せつかく大學の工學部を卒業しようといふまぎはまで行つたのに、兵に狩り出されて、大陸ですごした年月むなしく、その生活の中斷に相應するやうなぐあひに、家の荒廢が歸還を待伏せてゐた。すべて崩れることしか知らない無慙な體驗であつた。この間の歴史的時間は一太の生活にとつて無にひとしく、からくもいくさの前後をつなぎとめる精神の手がかりとしては、戦地にゐてもいつも肌からはなさなかつた十字架といふ針の無い時計ただ一つであつた。

この小さい銀の十字架には、カトリック信者であつた祖父の信仰がこもり、あはせて一太みづ